魔王と救世主

あさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と救世主

【Ｎコード】

Ｎ１３４８Ｕ

【作者名】

あさい

【あらすじ】

魔王さまに（不本意にも）溺愛されてしまった人間の女の子の話。

魔王と救世主

ノックの音がしたけれど、少女は毛布から顔を出さない。それが誰かなんて分かりきっているからだ。

とんとん、とんとん、とんとん、とんとん。

一定のリズムでなんどもなんどもノックが繰り返される。けれどもそれも少女が頭から毛布をかぶって動かないでいれば、そのうちやんだ。息を吐き出して熱くなった毛布から顔を出す。途端少女の目に入る、無駄に豪奢な部屋。

彼女の潜り込んでいるベッドは淡い水色の天蓋付きだし、クローゼットに入りきらない華美としか言えないドレスは床にまで広げられている。テーブルには変な彫り物がされ見るからに高そうだし、対になっている椅子もそれに座る青年の着ている物も――

「って、なんでいるんだ！」

青年に思わず少女は叫んだ。

優雅に椅子に腰掛け、テーブルに肘をついてにやにやとこちらを見ている黒髪の青年。角度によっては深い青にも見える彼の膝までの長さのとりあえず高そうな上着、左手に付けているシンプルながらも細かい細工のされたとりあえず高そうなブレスレット、組んだ脚の先を包む良い革を使っているとパッと見でもわかるとりあえず高そうな靴。要するに青年に身につけているもの全てが、確かな価値はわからないがとりあえず高そう。

青年自体も値段をつけるとしたらとりあえず高そう、ではなく間違いなく高い。墨を流したような真っ黒な髪、同じく真っ黒の目。肌は白いし背は高い。ぱっと見た感じ貴族か何かのボンボンにも見える。けれども、彼女は彼がそんなものではないということはよく知っている。

少女の声に彼の笑みは深くなる。

「おはよう、眠り姫」
「姫じゃない！」
「じゃあ我が妻」
「なりたくてなったんじゃない！」
「俺の嫁？」
「なんかものすごく嫌だ！」
「わがままなお姫様だなあ」
「それも嫌だ！」

楽しい掛け合いの途中というのに青年は立ち上がり、そして彼女のいるベッドに腰掛けた。頭以外のものを毛布の中に隠して芋虫状態の彼女の、背中のあたりに手を置く。少女は噛み途中付かんばかりの勢いで叫ぶ。

「私は魔王なんか大っきらいなんだからな！」

少女が想いを込めて言い放った言葉は、

「嫌よ嫌よも好きのうちって言うし。リズィはツンデレだしなあ」

呑気な言葉で片付けられた。
少女――リズィは青年――魔王を睨みつける。魔王はぽっと頬を染めた。

「熱視線？　くらっとするんだけど」
「そのまま消えろっ！　目からビームで消えろ！」
「恋愛光線なら喜んで」
「恋も愛もない！　マイナスだ！」

「冷たいなあ、でもマイナスにそれ以上のプラスを足せば結局はプラスになると思わない？」
「思いたくない！」

怒鳴っても叫んでもそれをうまく転がされる。
ああもう最悪だ。絶対間違っている。そう思ってぎゅっと眼を閉じてひらいてみても、残念ながら柔らかいベッドの感触と魔王のニヤニヤ笑いは消える様子もなかった。
好きで魔王なんかに寵愛されてるわけじゃない。
魔王は芋虫状態のリズィの背中のあたりに、仰向けに倒れこむように上半身を乗せる。黒い上着がふわあとベッドに広がるけれど、背中に男一人の上半身背負ったほうは冗談じゃない。そんなに重くはないけれど、その体温だとか頭の感触だとか、そういうものが嫌だ。

「重い！」
「多分それが愛の重さだよ」
「私は！　魔王の！　愛なんていらない！」
「じゃあ俺個人としての愛をあげる」
「それもいらないっ！」

じたばたしてみても魔王は動く気配がない。最低限の訓練はうけたはずなのに、どういうわけかぴくりともしないのだ。
分厚い毛布の中で動きまくったら息が切れる。リズィは毛布の中でもぞもぞ動き、両腕を出した。彼女の背中から半ば落ちかけている魔王の頭がぐるりと回って彼女の顔を見る。

「そんなこと言ったって、君の国でも俺の国でも君は正式に俺の嫁だし」
「それはお前のせいだ！」

「そういえば、君って国だと救世主なんだっけ？　あの魔王の侵攻を止めた聖女として」
「ぐっ……」
「もし君が俺と離婚なんてしたら、俺どーしよう。まず君の国は俺の物、つまり君の国の人はみんな俺の物、結局君は俺の物」
「ひとでなし！」
「だって俺魔王だもん」

爽やかな笑顔を向けられても、言ってることの中身はどす黒い。その髪の色とおんなじだ。
リズィは嫁で、魔王は夫だ。リズィは間違っても認めたくないがそれは決まっている。ものすごく納得したくないけれども。
魔王はリズィの背中の上から体を起こす。ふう、と彼女は息を吐いた。

「さて、夫婦の営みでもしようか？」

魔王は艶っぽい笑みを口元に浮かべる。リズィは本能的に逃げろと思う。頭の中で危険信号が鳴り響く。

「なっ、お前何考えてるんだ！」
「だって当然でしょ？　夫婦なんだから。俺は君が好き、君が俺のことを嫌っていようと俺は君が好き」
「よくわかってるな……」
「好きな相手と自分の子ども、見てみたくない？」
「私は嫌いな相手とそういうことはしたくないっ！」

徐々に魔王の顔が近づいてくる。リズィは毛布芋虫のままごろごろとベッドの上を転がる。そんな芸当が可能なほどベッドは広い。

「っと。それ以上行くと落ちるよ？　あ、もしかして我が妻は痛いほうが好み？」
「んなわけあるかっ！」

落ちる寸前のところでベッドの上に引き戻された。そして、それはベッドに半ば以上乗っている魔王のお膝元。魔王はとても、そうとても素敵な笑顔で微笑んだ。
とんとん、と控えめにノックの音。

「入って！　開けて入って、この悪魔引っ張り出して！」

ぴちぴちと抵抗しながらドアへと叫んだ。

「だから俺魔王だって」
「失礼しますー。あー、やっぱりまおー様、ここにいらっしゃったんですねぇ」

ドアの陰から顔をのぞかせたのは、リズィとさほど歳の違わない少女だ。ふわふわとウェーブのかかった髪を肩のあたりまでたらし、お仕着せのメイド服に身を包んでいる。ただし、彼女の体は青く半透明で、うっすらとドアの向こうが透けて見えている。水の精霊だ。
メイド――ミリアは地に足つかない足取りでベッドへと近づく。

「まおー様ぁ、お仕事でーす。そろそろシドさんがお怒りになるので戻られたほうが良いですよぉ？」
「もうちょっと妻とラブラブしたいんだけど」
「最初っからしてないだろ！」

大きなため息をついて魔王はベッドから降りる。ばさりと上着が翻る。とりあえず目下の恐怖が過ぎ去って、リズィは息を吐き出し

た。

「それじゃあ我が妻、行ってらっしゃいのちゅー？」

そんな彼女の目の前に顔が突き出される。

「し、な、い！」

「本当にツンデレだなあ」

けらけらと笑いながら魔王は部屋を出て行った。ツンデレじゃなくて本当に嫌われているという考えはないのだろうか。その黒い背中が完全に視界から消えたところで、リズィは毛布から這い出した。あいつの選んだ少女趣味のパジャマなんて絶対に見られたくない。

「お疲れ様でしたぁ」「ほんっとに疲れた。ミリア、手ェ貸して」

「はぁい」

差し出された手に頬を押し付ける。攻防で火照った顔には彼女の冷たい水のては心地良い。それを見てミリアはほほえむ。

「リズィ様は、ずいぶんとこちらに慣れられたようですねぇ」

「それって初日にミリアのこと見て悲鳴上げたことへの嫌味？」

「いえいえ」

ほほえむメイドの顔からは真意は読めなかった。でも、だれだって半透明メイドさんなんて見たら同じ反応をするとおもう。けれどその衝撃を乗り越えてみてみれば、ミリアは普通に可愛い女の子だ。

顔が冷えたので彼女の手を離し、ベッドに腰掛ける。

「ミリアはずっとそれが普通だろうけど、私は初めてで驚いちゃっ

ただけだよ。でもミリアが人間の国に来ても同じ反応すると思うけどな」
「きっとそうでしょうねぇ」
「だろ？　みんな人間なんだよ」
「それはびっくりですー」

魔物の国に強制的に連れてこられて知ったのだが、ここは幾種類もの生き物が共生している。ゴブリン、スライム、ゴーレム、火の精、ユニコーン。他にもリズィではパッと見わからないような種族もたくさん。人間の国では人間のみが固まって生きていたから、国の外に行ったことのないリズィには初めて見る種族ばかりだった。

「でも、まおー様には慣れられないみたいですねぇ？」
「それはあいつが悪いからっ！」

ミリアの言葉にとっさに叫ぶ。全部全部、あいつが悪い。
もうすぐ魔物の国との戦いになると王が兵士たちを集めたあの日、リズィの運命はトチ狂った。要領の得ない王の長ったらしい話の最中、王の元へと魔王の手下である三本足のカラスが現れ言ったのだ。『前から１６５番目、右から１２番目の娘を嫁に寄越せ、そしたら侵攻は止め、和平を約束してやる』と。そして、それはリズィだった。
人の国と魔物の国、戦力的には劣るが国を無くしたくない王が抵抗するという戦いのはずだった。ひとりの死もなくして和平がもらえるとしたらそれを拒否する筈はない。
かくして、リズィは嫁に出された。本人の意思なんて誰ひとりとして気にかけてくれなかった。

「普通いきなり嫁になれとか言う！？　私だって一応女の子なんだしさ、恋とかして結婚したいよ！　ミリアだってそう思うよね！？」

「そうですねぇ、恋はしたいですー」
「だよね！？」

ミリアの同意の言葉にリズィはテンションを上げる。

「でしたら、まおー様となさったらいかがですかぁ？」
「ナイ、それはナイ」

しかしそれは一瞬で下がった。顔の前でひらひらと手を振る。
あいつを抱きしめるとか、キスする、とか、その……子供を成すとか。創造しようとするだけで無理だ。第一、リズィは今までずっと魔王を倒すべき相手として教えられてきた。それは『倒すべき相手』であり魔王という人格を持った生き物のことではないけれど、簡単に変えられるワケがない。

「でもぉ、まおー様はリズィ様のことをこれ以上なく愛してらっしゃいますよー？」
「それが一番意味わかんないんだけどね」

一体どこでリズィを見てあそこまでベタぼれできるというのか。っていうかどこから兵士たちを見てたんだ。よく考えればそれだけ人の国にも魔物のネットワークはあるということで、やはり戦わなくてよかったとも思うのだけど。
いくら愛情表現してもかけらも返さない相手、何が面白いんだろう。そろそろ飽きて家に帰らせてくれればいいのに。

「小さいころの約束だとかそういうありがちな物なんてないし、第一魔王みたいなあからさまに魔王魔王したやつみたら忘れるわけないし」

全身黒いし、やな感じの笑み浮かべてるし。すごく魔王魔王してる。超魔王。それを除いても、多分歩いていたらそこらの女が振り返るぐらいには整った顔をしている。ただし口を開かずニヤニヤ笑いもせずおとなしくただ立っているだけならばという注釈がつくけれど。

リズィ本人がわからないものを、魔物側であるとはいえミリアがわかるわけはないだろう。彼女もほわほわと笑っている。

「私はー、リズィ様もまおー様もだーいすきなので、お二人が仲がよければ嬉しいですよぉ？」

「……ミリアは本当に魔王のこと大好きだもんね」

「はいー。まおー様は我らが父であり母ですからぁ」

「それよくわかんないんだけど」

「民は、みな魔王の子であり臣である、ということなんですよぉ」

全然わからないが、人には理解出来ない魔物の掟なのだろう。

さぁて、とミリアがクローゼットを開ける。うげ、とリズィは顔をしかめる。

「今日はどのドレスにいたしますかぁ？」

「そういうフリフリひらひらしたのは似合わないと思うんだけど……」

「そんなことないですよぉ、よぉくお似合いですよー」

フリルにリボン、今までのリズィの生活には到底無縁だったものが広がるクローゼット。ベッドの上を後退しようとするリズィの脚に、伸びたミリアの髪の毛が絡みついた。

▼

ひとりでは到底着替えられない、というよりも着方が意味不明なリズィの為にミリアが手取り足取りしてくれて、なんとかドレスを着て。背中だとか脇だとか、そういう手の届きにくいところにリボンがたっぷりとあるのが全部悪い。その全部を止めなきゃいけないわけじゃないらしいがそんなの見なきゃわからないし。

裾にひっかかって転びそうになりつつリズィは廊下を歩く。別に監禁されているわけでなし、城の中は自由に歩くことができる。ただし無駄に広いため、下手に動きまわると迷子になる可能性もある。

自分なりの目印を見つけながらリズィは城の中を探検していく。しかし、ドレスがとにかく歩きづらい。そういうのを狙った服なんじゃないかと思うほどだ。

「っと」

また転びそうになりリズィは慌ててドアに手を付いた。

城の廊下は右手側に窓、左手側にドア。いくつもあるドアをたまに開けたりして遊んでいる。たいていは使われていない客間らしくがらんとした寂しい部屋だが、たまにリネン室や厨房、書庫、武器庫なんかは自分の中で勝手に『あたり』にしている。

窓の外は階段を登った記憶なんてないのに何故か二階だ。外は中庭なのか、ふわふわとした草がたっぷりと生えている。端の方にある木には見たことのない桃色の花が咲き誇っている。

適当にぱたんとドアを開ける。

「だとしても僕は反対です！　リズィ様は、あなたを殺してくれるわけがない！」

耳に飛び込んだ言葉に、リズィはぽかんと口を開けた。物騒な言葉が聞こえた。殺す、だとか。それはリズィの今までの生活にはちらりちらりと聞こえてきた言葉だけど、ここに来てから久しく聞い

ていない言葉だった。
混乱した頭で部屋を見る。壁際にずらりと本棚が並んだ部屋だ。どうやら『あたり』の部屋のようだ。奥にある窓の左右も本棚。窓の前には大きな机、腰掛ける魔王とその前に立つ魔王と同じぐらいの年の金髪の青年。青年もぽかんとこちらを見ている。
リズィの頭はゆっくりと回転を始める。
魔王の声ではなかったから、きっとこの金髪の青年だろう。しかしなぜ、どうして。
魔王が立ち上がる。口の端だけ釣り上げ、あからさまに作り物に見える笑を浮かべてこちらへと歩いて来る。無意識のうちにリズィの脚が後退する。途中ぽんと金髪の青年の肩を叩けば彼は弾かれたかのように飛び上がった。

「リズィ」

魔王の手が彼女へと伸びる。その手を腰をかがめて避け、廊下へと飛び出した。振り返らずそのまま駆け出す。足音は絨毯が吸い込んでいるから聞こえない。けれど気配が。隠すつもりもないらしい威圧的な気配がすぐ後ろにある。

「どこに行くの？」

囁く声はすぐ耳元で聞こえた気がした。
捕まってはいけない、となぜだか思う。その直感に従って、窓から飛び降りた。下は草むら、転がって衝撃を殺す。ふわふわとしたドレスなのも少し衝撃を減らしてくれたのかもしれない。後方担当だが最低限の訓練は受けている。そのまま向かい側の窓目指して駆け出す。けれども、衝撃を殺してくれたそのドレスが脚に絡みついてきた。たぐりあげようと手を伸ばす。ひっかかる。リズィの体が前へとつんのめる。捕まりたくない。それだけを思って頭を抱え、

前転の姿勢になり。

「ずいぶんとアクロバティックなお姫様だなあ」

背中のリボンを掴まれた。リボンの一片だけを掴まれたのだったら無理に引っ張れた逃げれるのかもしれないが、感覚的に鷲掴み。とりあえずじたばたとしてみても外れない。

「離せ！」

無駄だと分かっていてもそう叫ばずには居られない。

「嫌。躾のなってないお姫様だなあ。勝手にドアを開けるのはダメだってお母さんに習わなかった？」

「居ない者に習えるわけないだろ！　離せっ、はーなーせー！」

「全く、君は本当に予想外で可愛いなあ」

振り向けば、いつもどおりの笑った目がそこにあった。少しだけほっとしている自分がよくわからない。

だから訊ける気がした。

「なんで、私がお前を殺さなくちゃいけないんだ」

たしかに魔王なんか大嫌いで、いなければいいと思っているけれども、それは殺したいと切望するほどではない。魔王に恋する未来と同じぐらい、魔王に剣を突き立てる未来なんて想像できない。

魔王は表情ひとつ動かさない。

「聞かなかったことにはしないんだ？」

「お前だけの事だったら知らないふりでもするけど、私も関わって

るんだったら知らない振りなんてできるわけがない」

この国のことだったらリズィが手を出さないほうがいいと放置する。でもこれはリズィが巻き込まれることだ。知らないところで巻き込まれるより自分で巻き込まれることを選ぶほうがいい。

でも、どう考えてもおかしい。なんで魔王の所にいたあの青年が、魔王が殺されることを望むんだ。

魔王は顔を緩める。

「まあ、なんにしても場所が悪い。移動しようか」

「え？　……ええぇぇっ！？」

リズィの腰を抱いて、魔王は上着の裾を掴む。ふわりとそれがリズィの視界を覆い、離れる。一瞬何が起きたか理解できなかった。そこは中庭ではなかった。先ほど彼女がドアを開けた部屋だ。

魔王の顔を見上げる。にやにやとした笑みが彼女を見下ろした。

「どういうこと？」

「瞬間移動とか、そんなかんじ？」

「お前っ、今までそれで私の部屋に入ってたのか！？」

「君の部屋も俺の城だもん」

「魔王様」

呆れたような声が二人の間に入る。あの金髪の青年だ。よく見ればこちらも魔王には負けるがなかなか整った顔立ち。並んだら背は魔王よりわずかに低いぐらいか。彼は眉を逆三角にして二人を見ていた。

魔王がリズィの腰から手を離す。今までの密着具合に気づいて慌てて距離を開けた。いまさらに顔が熱い。ぺたりと手を当てれば、ミリアの手ほどじゃないにしろ少しは顔が冷えた。

「シド、夫婦のいちゃつきの最中に声を掛けるのはルール違反だと思うけど？」
「申し訳ありません」

シド、と呼ばれた青年はわざわざ頭をさげる。魔王は肩をすくめた。

「しかしこのままでは話が進みませんし、どうせでしたらちゃんと彼女にも話して事を進めていただいたほうが良いと思います」
「そうだ、私が巻き込まれるんだったら私にもちゃんと話せ！」
「リズィ、そんなに俺のこと知りたいんだ？」
「そうじゃなくっ！」

一緒にいればとにかく色々乱される。リズィは頭をかきむしる。
そうじゃない。聞かなきゃいけないことはあるんだからこれ以上ペースに持ってかれちゃだめだ。
魔王よりちゃんと話ができそうな、シドという青年のほうを向く。彼はリズィが自分を話し相手に選ぶとは思わなかったのか緑の目をぱちくりさせている。そういう表情をすると妙に幼く見えた。

「なんで私があいつを殺す必要があるんだ？」
「それは普通俺に訊かない？」
「訊かない。お前に聞くと話が面倒になる」
「……おそらく、それが正しいご判断です」

はあ、とシドはため息を付いた。
それからリズィを目に映す。

「魔王様は、死にたいのです」

「……へ？」

その意味が取れず、リズィは思わず変な声を上げる。死にたい、という意味がわからない。これだけいい城に住んでいて、よくわからないけど愛されてて、それでなぜ死にたいなんて言い出すのか。

「別に死にたいんじゃないよ。俺は魔王をやめたいだけ」
「なんで？」
「そろそろ飽きてきたんだよ、魔王に」
「だったらやめればいいだろ」
「やめられないんだよ」

魔王は笑う。それは、どこか疲れたように見えた。今までそんな顔は見たことない。

「魔王になるっていうのは永久就職するってことなんだよ」

君が俺の嫁になるのと同じだねと笑い混じりに言われたので、そこは了解していないと噛みついておく。そこだけはちゃんと否定しておかないといけない。

「そういうことだと思うけど？　だって君は俺の嫁、それはずっとだよ？」
「だから私はしたくて結婚したんじゃない！」
「……よろしいでしょうか」

話が進まないと思ったのかシドが割り込んできた。慌てて彼の方を向き直す。シドは、爪の形の綺麗な指を、二本出す。

「魔王様はご自分の意志で魔王を辞めることはできません。魔王を

辞める方法はふたつ」

そこまで言われればリズィにもわかる。

「その片方が、誰かが魔王を殺すってことなんだろ？」

「正解」

笑う魔王だけど、でも納得できない。何故リズィなのか。

「そんなの他の魔物にやってもらえばいいだろ！　なんで私なんだ、それに嫁って」

「はいはい、それも今から話す……より見せたほうが早いな。シド」

魔物に名前を呼ばれ、シドはとても嫌そうな顔になる。

「……やらなければなりませんか」

「やらないとリズィに見せられないんだから、ほら早く」

渋々といった様子でシドは右手を出す。軽く手首を振れば、綺麗な爪がさっと伸びた。いやな予感がした。

「ざっくりやってね」

「……御意」

「ちょっ、」

リズィがシドの腕を掴む、それより早く彼の爪が魔王の顔を撫でる。ぴちゃん、と温かいものがリズィの頬につく。そっと指で拭えば、深紅のそれが指についた。茫然と、それを見た。場違いなまでに深々とシドは礼をする。

「お前っ！」
「とまあ、こういうこと」

シドに殴りかかろうとしたその瞬間に声。笑い混じりの聞き慣れてしまった声にそちらを向く。
爪に抉られたはずの顔には、傷ひとつなかった。白い、普段からあまり日にあたらないのだろうと思わせる肌はとても綺麗で。自分の頬を軽く撫で、彼はリズィに微笑みかける。

「子であり臣である魔物は、父であり母である魔王を傷つけられない」

笑う、魔王の顔へと手を伸ばす。その頬に触れる。魔王はぴくりと肩を揺らすが気にせず肌に手を滑らせる。瘡蓋すらない。何事もなかったかのような、傷一つない肌だった。

「ほんとに、傷もないんだな」
「うん。だから、魔物は俺を殺せない」
「でも私だって」
「それにもうひとつ」

お前を殺せない、と。リズィの言葉を遮るように魔王は言葉を続ける。
そうだ、最初魔王をやめる方法はふたつあると言っていた。
魔王はさりげなくリズィの手を自らの頬から外す。

「俺の子が生まれること」
「……うん？」
「俺と、君の子」

わざわざ魔王とリズィを指差して、そんな戯けたことを言った。
いやいや、待て待ていやいや。

「それこそ私じゃなくたっていいだろう！？　子であり……なんだっけ、まあいいや、魔物だったらだれでもお前と結婚でも子作りでもしてくれるだろ！？　なあ、シドとかってあんただって！」
「……ま、魔王様のご要望とあらば」
「シド、お前男だろ」
「魔王様のご要望とあらば、……頑張ります」

シドは頭を下げる。しかし顔色は悪いが。魔王よりは血色の良かった肌は白を通り越して青くなっている。
ただね、と魔王は続ける。

「魔物は同族同士でなければ魔力の種類が違うから、子は為せないんだよ。シドは竜。そして俺と同じ種族は百年ちょっと前に滅びちゃった」
「それ、は……」
「さぁて問題です、魔力のない生き物といえば？」

魔力がなければ反発しないから子がなせる。つまり人間ならば、ってちょっと待て。

「やっぱり私じゃなくてもいいんじゃないか！」

人間でさえあればいい。リズィである必要はない。思わず前のめりになって突っ込む。

「私じゃなくて他の子でもよかったんじゃないか！　どんな理由かと思ったら、人間でさえあればよくて私である必要なんか全然ない

じゃないか！」
「でも俺は、リズィがいい」
甘ったるい声が、耳から入り込んだ。
魔王はもう嫌っていうほど見慣れた胸焼けしそうな笑みを浮かべ、低い砂糖をまぶしたような声で囁く。
「俺は、リズィがいいんだよ」
彼は恭しくリズィの手を取り上げる。腰を曲げて深く頭を下げ、リズィの手の甲に唇を押し当てる。まるで騎士が姫にやるそれだ。
茫然とするリズィに、にやりと笑み。彼女ははっと我に返って手を払った。二三歩後ずさるリズィに、魔王は意地の悪い笑いを向ける。
「それに今朝も言ったと思うけど、もし離婚するっていうなら侵略開始、そして君の国は俺のもの、結局君も俺のもの」
「最低だな！」
遮るようにリズィは大声を出す。楽しそうな魔王とおろおろするシドに背を向け、ドアへと走る。ドアを開け、ちらりと振り返った。
「でも私は、お前を殺す気なんてないし子供をつくる気もない！」
そしてドアを壊れかねない勢いで閉め、出て行った。
彼女の背がドアの向こうに消える、それからかっちり5呼吸間をおいて。
魔王はこらえていた笑いを爆発させた。もう抑えきれない様子で腹を抱えて、ただただ笑う。それを見て従者はため息をつく。

「聞いた？　今の聞いた？　かっわいいなあ！」
「魔王様」
「大丈夫、もう聞こえるところにはいないよ。しかし可愛いなあ、人間の女ってみんなああなの？　なんにもわかってない子は本当に可愛い」

涙が出るほどに笑い転げる魔王に従者は眉をしかめる。
魔王は、なにもわかっていないのがわかったからだ。

「あまり、遊びすぎないほうが」
「わかってる。情が移ると面倒だしね。でも可愛いから仕方ないよ。可愛くて可愛くて仕方ない。可愛いから無理矢理犯したりするのはナシだなあ。それにしても可愛い。なにも知らなくて」

未だに魔王はけらけらと笑い続ける。
従者は再び同じ言葉を吐く。

「あまり、遊びすぎないほうが」
「わかってるってば。シドは昔から心配性だなぁ」

笑う魔王は恐らくなにも気付いていない。少女の目にあった決意の色や、従者の心配なんかなにも気付いていない。
昔からこの人はそうなのだからと竜の従者は息を吐く。

「さぁて、リズィに次は何をしようか？」

上着をふわり揺らし身を翻す姿は、紛れもなく人の心を持たない魔王だった。

小話1

本日分のお仕事（どこぞの領主が鬼畜だとかどこで雨が降らないから雨女の派遣を頼むとか最近どこぞで不穏な騒ぎが起きているとか）を終わらせてリズィで遊ぼうかななんて思いながら、魔王は城をふらふら歩いていた。この時間だったらどこにいるだろう、と周りを見たところできゃらきゃらと高い声が耳に届く。細く開いたドア、おそらくここからだ。

リズィの部屋ではない。残念ながら自分の住んでいる城の中を完璧には覚えきれていない駄目城主は、なんの部屋だったかと思いつつドアを開けた。なんの部屋であろうとも、城主であり魔王。リズィ以外には拒否されないという事実の上でだ。メイドの着替え途中なんかだったら非難轟々かもしれないが。

「また勝ったー！」
「リズィ様お強い！」
「まぁた負けちゃいましたー」

どうやらメイドの控え室のようだ。メイド服を来た女型の魔物の中で、ひとりだけ違う服装の少女。明るい紅茶色の髪を肩のあたりで軽く跳ねさせ、橙の瞳はきらきらとテーブルの上を見ている。天井へと突き上げられた両腕は女としては少々太いかもしれないけれど、服の上から握ってみたかんじではあれは筋肉だ。本日の服装は軽めのワンピース。おそらくリズィ自身が選んだんだろう。

「これで何連勝ですか？」
「9連勝！　運だけはいいんだよね」
「あーたしかに。あの魔王様を手に入れたんですもんね」
「それは違う！」

耳まで真っ赤に染めて彼女は食って掛かる。魔王は思わず肩を震わせた。
そのとおり。魔王がリズィを手に入れたのであって、彼女が魔王を手に入れたんじゃない。彼女はいつだって魔王の手のひらの上で転がされている。

「あらぁ、噂をすればっていうやつですねー」

間延びした水のメイドの言葉に、ぱっと橙の瞳がこちらを見る。その顔は耳まで真っ赤だ。魔王は人当たりのいい笑みを作り、片手を上げて見せる。

「やあ、お姫様」
「お前っ、なんでこんなときに！」
「きゃあ魔王様！」「魔王様だわー」

きゃあきゃあとメイドたちが黄色い声を上げる。
魔王が進めばメイドたちはぱっと左右に別れる。彼女の前に座っていた水のメイドも、主が来たからかさっと立ち上がりリズィの横に控える。魔王は空いた椅子に腰掛け、テーブルに頬杖をついた。
転がっているのは二つのサイコロと不透明なグラス。

「へえ、お姫様は賭け事がお得意？」
「何も賭けてないし、お姫様って言うな！」
「はいはい俺の嫁」
「だーからー！」
「偶数？　奇数？」

怒鳴る彼女の言葉にかぶせるように問い、グラスをサイコロの上

に伏せる。二度三度とグラスを揺らす。サイコロとグラスがぶつかり、からんからんと涼しい音がする。幾分赤みの引いた顔で彼女は魔王を下から睨めつける。

「何企んでるんだよ」

「ひどいなぁ、俺がいつもリズィにセクハラしようと企んでるみたいじゃない」

「よくわかってるな」

セクシャルな意味なんて本当は全くないことなんて、彼女は知らない。代わりにギャラリーとなっているメイドたちから歓声が湧き上がる。女は本当に元気だ。がたたっと音を立てて椅子から立ち上がったリズィがテーブルに手を叩きつける。

「違っ、だから私はこいつと子供作る気なんてないんだからなー！」

「リズィ様、応援してますよ！」

「魔王様頑張れー♪」

「だから違うって言ってるだろぉ……」

がくりと肩を落とすリズィ横目に愛想よく手を振っておいた。

子ができるのは魔王の最終目標。子が生まれれば魔王をやめられる。魔王でなかったこと生まれて以来一瞬だって無いけれど、やっていけないこともないだろう。それに、魔王でなければ死ねる。ずるずると椅子に座り直す彼女にぐっさりと剣で刺されるのもいいだろう。どちらにしてもリズィはなかなかやる気になってくれないようだが、おいおいどちらかはやってもらう。最悪の場合押し倒せばいい話だ。その後彼女の体が無事かは不明だが。

「じゃあリズィ、期待に沿ってかけでもする？」

「期待してないししたくない」

彼女はそっぽを向く。愛想の欠片も何も無い。本当に彼女は、魔王の気分一つで自分の国が滅びるとわかってるんだろうか。だからこそ可愛くて面白い。だからこそ、好意を持ってくれたところで絶望させてみたいな、なんて悪趣味なことも考える。

「俺が勝ったらキスしてよ」

「なっ……！」

オレンジの目がまんまるになる。あのまま指をいれてくり抜けるんじゃないだろうか。

口をぱくぱくと開閉させるも言葉が出ない彼女の代わりに、メイドたちからは歓声ともなんともつかないものが広がる。魔王は余裕ぶってにやにや笑って見せる。

「9連勝中なんでしょ？　だったらいいじゃん、勝てるでしょ。俺が勝ったらキスしてよ。もしリズィが勝ったら願い事ひとつきいたげる」

その目が光った。魔王の手からガラスグラスを奪い取る。からら、からからと鳴るグラス。彼女は、まっすぐに魔王を見据える。

「本当に叶えてくれるんだな？」

一瞬その目に気圧された。

……気圧された？　誰が？

口の端を吊り上げる。

「もちろん。今リズィが持ってるってことは、俺が答える側でいいのかな？」

「うん。私が答えるんじゃ、お前が魔法でなにかしないとも限らないだろ」

ほとほと信用はないらしい。まあ、もともと彼女が答えたら目を変えるつもりだったんだけど。

まあいいか、勝っても負けても損はない。いつのまにか控え室は静まりかえっている。

「偶数」

リズィはグラスを上げる。

出てきた二つのサイコロは――

「１０連勝！」

ガッツポーズ。メイドのひとりがその手に手をぶつけ、別のメイドが頭に抱きつく。彼女は、随分と愛されているようだった。

▼

結局その後リズィはももみくちゃにされ、魔王はその間にさっさと部屋を出た。リズィは楽しそうだったし、あとで部屋に行ったときにでも願い事はきけばいい。

ということで、夕食後の彼女が部屋でくつろいでいるだろう時間にドアをノックした。

「魔王！？」

「熱烈歓迎？」

こん、と叩いただけで飛び出してきた。珍しい、いつもは１００回叩いても出てこないので勝手に中に移動しているのに。それだけ叶えてほしい願いなんだろうと結論づける。きらきらと光るオレンジの瞳で見上げられるなんて初めてだ。本当に可愛い。

部屋に入ってドアを閉める。リズィは待ちきれないとばかりに落ち着きがない。犬ならしっぽをぶんぶん振り回している。

「本当に願いを叶えてくれるんだよな！」

「俺のお姫様の願いならなんだって」

「これっ！」

お姫様、という言葉にも反応せず、彼女は魔王にそれを付きだした。

それは白い封筒だ。

「ラブレター？」

「違うっ！」

睨みつけてくるのはいつもの目だ。彼女の願いが予想してなかったものであることと同時に、彼女が手紙を出す相手がいるということにも驚いた。今まで親兄弟に会いたがる様子を見せなかったことから、勝手に天涯孤独なのだろうと思い込んでいた。

「相手は誰？　もしかして男？」

彼女は瞠目する。

顔には出さないけれども魔王も動揺していた。

男？　恋人？　いたの？　まだ好きだったりするのか？

「だれだっていいだろ！　お前には関係ない！」
「男？　えー、もしかして恋人？」
「違うっ！」

対してリズィは動揺していると見てわかるほどだ。目はきょろきょろと左右を見回している。素直に言わないその様子にいらいらする。彼女が魔物ならば無理矢理に吐かせることができるのに、彼女は人間だ。面倒な生き物め。
一歩近づけば一歩下がられる。そんな楽しい鬼ごっこの気分ではないので、大股で一気に距離を詰めて腰に腕を回す。

「ちょっ、バカ！」
「リズィ」

耳元で囁き――後ろでに隠すそれを奪い取った。彼女が手を伸ばすより早くそれを頭の上へとかかげ、ぴらぴらと揺らして見せる。魔王よりも背の低い彼女では、手を伸ばしても届くわけがない。

「返せバカ！」

宛名を見る。人魔共通語ではなく人間語だ。

「誰宛？」
「言わないっ！」
「……まあいいや。これを届ければいいんでしょ？」
「見るなよ、絶対中身観るなよ！」
「はいはい」

叫ぶ彼女をなだめるように頭を撫でて、魔王は部屋を出た。
そして、向かうは書庫。扉を開けたとたん鼻に入ってくる埃っぽ

い匂い。指を上へと向ければランプにぱっと火が灯る。

「どこだったかな」

人語と魔物語の辞書は。

本棚を眺め、それらしい背表紙の本を引っ張り出す。人語は魔物語と違いある程度系統だった言葉の並びがあるから簡単だ。宛名の単語を探す。それほど長い綴りではなく、すぐに見つかった。

……たしかに男だ。それも、とても親しい。

「バカバカしい」

親愛なる兄へ。そう、書かれていた。

辞書を戻し、その足でシドの部屋のドアを叩く。返事よりも早くドアを開けた。

「魔王様っ！？　なななんですか！？」

「これ読んで」

ひよこパジャマのシドに手紙を差し出す。従者は訝しげに受け取って、魔王の顔を見返す。

「……どう見てもリズィ様の書かれたものですが」

「そう。読んで」

「いいのですか、お兄様に書かれたもののようですが」

「いいんだよ。だってリズィは俺のなんだから。読んで」

最後の言葉は命令だ。嫌そうに、シドは封を切った。

竜族は長生きで、様々なものを知っている。頭の奥に押し込んでいるからなかなか出てこなくて本を探すほうが早いとよく本人は言

っているが、言葉だったらすぐに思い出せるだろう。それは予想通りだった。
ところどころ首をかしげながらもするすると読んでいく。とても、バカバカしい内容を。　自分は無事だ、と。魔王は悪人ではない、と。心配しないで、大丈夫だから、と。

「……親愛なる兄へ、と」

魔王は肩を震わせる。魔王は悪い人じゃない？　こんなにうまく騙されて遊ばれているのに？
ああ、本当に可愛い。

「楽しそうですね」
「本当にね。本当に、いつもどおりリズィは可愛いよ」
「……その割に、いつも以上に楽しそうですが？」

▼

「魔王！　中身見てないだろうな！？」
「中身は見てないよ？　お兄さんにはちゃんと届けるよ」
「やっぱ見たんじゃないか！　バカ！」
「俺は、中身を見てないよ」
「ホントだな！？　信じるからな！？」
「……可愛いなあ、リズィ」

小話2

リズィは一人城の中を歩きまわる。先日の魔王の件があってから一応ドアをノックしてからだ。ふわふわと脚にからまるスカートと今にも転びそうな踵の高い靴も、だんだんと扱い慣れてきた。そのことをこの間エルフのメイドに自慢したら「魔王さま色に染まってるんですねー☆　きゃあ」なんて言われたけど。

ぶんぶんと頭を振って嫌な思い出を脳内から吹っ飛ばす。ひょいひょいと絨毯に足を取られないよう気をつけながら歩く。城の大まかな地図は頭に入ってきている。あとは東側にある塔と広い庭。それの探検を終えたら次は城下町にも行ってみたい。さすがにそっちに行くときは魔王に一言言ってからのほうがいいだろうか。

じゃあ、まずは東の塔か。そのためには一度城を出る必要がある。入口へと脚を向けたところで、見慣れた顔に見つかった。

「あ、リズィ」

「お前なにやってるんだよ」

仕事してなくていいのか、と暗に言えば魔王は爽やかに笑う。

「そろそろティータイムにでもしようかなと思ってたんだよ。リズィも来る？」

「お前の顔見ながらお茶なんて嫌だ」

「お菓子もつくよ」

「うっ……」

城の料理は美味しい。お菓子なんかほっぺたの落ちるほど美味しい物も多くて、多分好きなだけ食べたら太る気がする。城のなか探検以外あんまり動いていないし。誘惑を断ち切ろうと魔王を見上げ

れば、その手の中にはいつの間にか小さなクッキーがつままれている。

「はい、あーん？」

「あー……しないからなっ！」

「はいはい」

奪いとって噛み付けばほろりと香ばしい味が口の中に広がる。そして、あっさりと誘惑に負けたことに気づいた。

▼

中庭に連れだされる。薔薇の花が咲き乱れる区画のすぐ側にこれまた高級そうなテーブルと椅子。さっさと待機していたらしいシドが、魔王の連れてきたリズィをみて目を丸くする。

「リズィ様も来るのでしたらチョコレートなんかも用意したんですが……」

「じゃあ今からミリアに持ってきてもらおうか？」

魔王は何故かにやにやとシドを見る。シドは目を逸らして紅茶を淹れる。

促されるままに椅子に座り、ミリアは皿に飾り付けるように乗せられているチョコチップクッキーを口に運ぶ。ほろ苦いクッキーとチョコの甘さが融け合ってやっぱり美味しい。

「そうだミリア、ゲームしない？」

「ゲーム？」

鸚鵡返しに聞き返せば魔王は手を振る。さっきまで空だった手の

中には扇形に広げられたカードがある。いつの間に出したのか、それをぺちりとテーブルの上に広げる。リズィはおもいっきり疑いの目で見る。

「今の動きとか、お前確実にイカサマするだろ」
「しないしない。大好きなリズィ相手にそんなのするわけないよ」
「……最初からイカサマみたいな手段で嫁にされた気がするんだけど」
「そう？　俺としては正攻法だったけど？」

そのあたりの言い争いは不毛なので途中でやめた。
魔王はテーブルの上に一直線にカードを広げる。慣れた手つき。

「また賭けか？」
「そうだね。君が勝ったらまたなにかひとつお願いを叶えるよ。俺が勝ったら……そうだな、なにか俺が喜ぶようなことしてよ」
「キスはしないぞ」
「キス以外で俺が喜びそうなこと探せばいいでしょ」

どうする、やる？　と魔王はにやにや笑う。

「……やる」

勝ったらまた手紙が出せる。そのこととこいつの喜びそうなことを天秤にかければあっさりとそれは傾いた。

「それでこそ俺の嫁。なにがいい？　ばばぬき？　ポーカー？　スピード？」
「神経衰弱！」
「……え？」

魔王はぽかんとリズィを見る。記憶力には自身がある。テーブルの上に広がるカードをぐちゃぐちゃに混ぜた。クッキーの入った皿は魔王がさりげなく端に寄せ、シドがカップを取り上げる。
並べられてすらいない、雑多に散らばったカード。右端の一枚をめくる。続いてその隣りのカードを。

「はずれ。お前の番」
「これとこれ。……はずれ。はい、リズィの番」

交互にめくってゆく。これだったらズルもあまりできないだろうし記憶力には自身がある。魔王がめくる。リズィがめくる。ゆるゆると、互いの手札が増えてゆく。テーブルの上の札が半分になったところで、手札はだいたい同じぐらい。

「なんで突然賭けなんだ。……あたりだ」
「この間負けて悔しかったからね。あ、外れ」
「嘘臭いな。あー外れた」
「ひどいなあ、俺だってそういうこと考えるよ？」

くるりくるりとカードはめくられていく。最後のカードをめくり終えたところで魔王は札を広げた。

「さて、どっちが多いかな？」

……おかしい。絶対に中盤までは同じぐらいだったはずなのに、後半から一気に差をつけられた。おかしい。途中から一気にめくるもの全てが当たり始めてそこからどんどんと同じ札ばかりが揃っていくなんて、絶対におかしい。
リズィは札をぺちんとテーブルに叩きつける。

「なんかズルしただろ！」
「してたとしても、バレなきゃズルじゃないんだよ」
「ずるい！」
「何言っても負けは負けでしょ？」

それじゃあ片付けようかと魔王は札をまとめる。くるりと手首を回せばそれらはもう消えていた。絶対におかしい。下から睨みつけるも魔王は涼しい顔だ。

「楽しみにしてるよ、『俺の喜びそうなこと』」

▼

魔王の喜びそうなこと。なんだそれ。リズィはベッドの上でごろごろと転がる。仕事の手伝いでもしてやればいいのか。でも魔物の国で使われている文字が読めない。人魔共通語なら問題ないけど魔語はどうしようもない。肩たたき？　あいつ肩こってるのか？　キス、は論外として、子作り、もめちゃくちゃ喜ばれるだろうけど絶対嫌だ。ころ……し、たくはない。それも嫌だ。あとなに喜ぶんだろう。そのどちらかだったら喜ばれるのは確実だけどどっちも嫌だなんてわがままだろうか。

「リズィ様ぁ、怖い顔なってますよー？」
「あー、ごめん」

ミリアの冷たい指が眉間に触れる。はあ、と息を吐き出した。

「ねえミリア、魔王ってなにされたら喜ぶと思う？」
「リズィ様が大好きっていってぎゅーって抱きしめてキスしたら喜

ばれるんじゃないですかぁ？」
「却下」
なんだその罰ゲームは。いや元々罰ゲームだけど。想像することすら頭が拒否するレベルだ。ミリアはきょとんと首を傾げるけれども、リズィが嫌がるだろうということをわかってて言う彼女はもしかしてサドじゃないだろうか。
「あとはぁ……リズィ様はなにされたら喜びますかー？」
「私か？　……ええと、」
美味しい物を食べたら嬉しいし、おもいっきり遊び回れたら楽しい。道端の屋台を覗いて色々と買えたら面白そうだ。魔王がそれを喜ぶかはおいといて。あとなんだろう。
「自分がされたらうれしいことを、したら喜ばれると想いますよぉ」
それはすごく正論で、でもすごく難しい。
リズィはベッドの上をごろごろと転がった。嬉しいこと。楽しいこと。面白いこと。幸せになれること。……それ、は。

▼

実は、魔王の部屋を知らないことに気づいた。いつも魔王は気まぐれにリズィの部屋にやってきたり廊下で出会ったり、あいつの部屋に行ったことは一度もない。部屋から出ようとしてはたとそのことに気付き、リズィは頭を抱えた。夕食も食べたし気合も入れてさあやろうと思ったのになんてことだ。今日やるのは諦めて風呂に入ろうか。くるりとドアに背を向けたところでノックの音。

「……魔王？」
「待っててくれたんだ？　我が姫」
「まあ、そうだけど」

素直に頷けば魔王は唇を歪めて笑う。体をどかせばするりと部屋に入ってきた。ミリアは夕食の片付けで部屋にいない。リズィと魔王の二人だ。魔王は勝手知ったるとばかりにさっさと猫足の椅子に座る。

「俺が喜びそうなこと、思いついた？」
「……一応。こっち来い」
「ベッド？　そっか、それは嬉し」
「違うっ！　合ってるけど絶対違う！」

いそいそと上着を脱ごうとするのを手をつかんで止める。冗談だよと魔王は笑ってリズィの頭を軽く叩いた。
ベッドに座らせ、リズィも隣に座る。息を吸って吐き出す。もう一度吸って吐いて、更に吸って吐いて。

「なにするの？」
「ちょっと待って、精神統一してるから」
「……ひどい扱いじゃない？　俺って」

ずるずると魔王から距離を取る。それでも広いベッドから落ちることはない。魔王の頭に手を伸ばしてひっぱる。おとなしく倒れこんできた体。黒い頭を太ももの上に乗せた。いわゆる、膝枕。

「……これだけ？」
「これだけっ！」

これだけでもどれだけの勇気が必要だったのかわからないくせに。どれだけ悩んだか知らないくせに。べちりとその額にでこぴんのひとつでもしてやりたい気分だったがそれは我慢する。直視するにはちょっとむかつきすぎるので微妙に視線をずらしつつ、その髪に指を通す。

「……こうされるのが好きだったんだ！」
「可愛いなあ」
「バカにしてるだろ」
「してないよ？」
「絶対してる」

髪はさすが魔王というべきかさらさらで、指通りもいい。ちょっと硬いところが犬の毛のようだと思ってくすりと笑う。魔王がひょいと片方の眉をあげる。

「笑うと本当に可愛いなあ」
「お前、いつも可愛いしか言ってないだろ。よし、これでおわりっ！」
「えー、もう？」
「十分だろ！」
「ぜんぜん。どうせ膝枕だったらこうしてみたり、」
「ひゃっ！？」
「あとこうやってみたり、」
「触るなバカ！」

内ももをつーっと指でなぞってくる手から逃げるようにベッドから転げ落ちる。四つん這いのまま振り返れば、人のベッドに寝転がったままの魔王はしてやったりの笑み。

「すごくいい眺め」
「もう出てけー！！」

魔王と婚約者と救世主

嵐は、突然現れる。

「ごきげんうるわしゅう、魔王様」

赤いくるくるとした髪をツインテールにした少女が、上から降ってきた。

庭でのティータイムの最中。魔王城の中庭は広く、一部は綺麗な薔薇園になっている。その中央に備え付けられているテーブルで、お菓子に釣られたリズィと紅茶を楽しむ魔王、そして竜の従者に水のメイド。４人の前に、彼女は突如登場した。

ありえない、とリズィはぽかんと彼女を見る。彼女のヒールの高い靴は、柔らかい草のなかに突き刺さってすらいない。空を見上げれば彼女の身長の2倍ほどのあたりに茶色い東洋風の竜がくねっている。もしかしてあれから飛び降りたんだろうか。魔王含め魔者たちは常識はずれなところがあるからありえないとは言い切れないけれど、むちゃくちゃすぎないか。

空から降って来た彼女に魔王は軽く紅茶の杯を向ける。

「やあローズ。上から飛び降りるのは下着が見えるからやめたら？」

「あら魔王様、あたくしの下着に興味がおあり？　それにしても随分と外見が変わられましたのね」

「いや全く。おばさんの下着は遠慮するよ。それよりリズィの下着が見たいなあ……って、そういえばそれって俺が選んだやつなんだよなあ」

「え、初耳だぞ！？」

テーブルに肘をついてアンニュイなため息をつく魔王だが、今の

発言は聞き捨てならない。慌ててドレスの前の部分を引っ張り、今付けている下着をみる。レースのたっぷりとついたこれを、魔王が選んだ、と？

「あ、でもちらりと見えるのはいいね」

「見るなっ！」

ばっと胸元を戻しつつ、椅子から飛び降りるように離れた。横に控えているミリアの隣まで逃げる。胸元を広げなければ見られないとわかってはいても、つい逃げてしまう。

そして、魔王にローズと呼ばれた少女が目に入った。

可愛い、というよりも綺麗な女の子だ。すらりとした肢体、細い腕。首は力を入れたらリズィでも折ってしまいそうなほど。年はリズィやミリアよりもひとつかふたつ下ぐらいか。なのにもう完成された美しさがある。黒いドレスの継ぎ目にとにかくレースをつけたような、リズィのドレスよりも更にふりふりふわふわとドレスを着こなしている。先程の魔王との会話からして、随分と仲良さそうだ。

彼女の髪と同色の瞳がリズィを捉える。なぜだか胸がどきりとする。相手は同性の、女の子なのに？

「あなたが魔王様のお嫁さんになった方？」

何かに囚われたかのように、リズィは頷いた。その紅の瞳がふわりと広がった、ような気がする。きれいな、子。

彼女はドレスをつまみ、脚を軽く下げて一礼する。

「魔王様の元婚約者のローズよ。以後、お見知りおきを」

そして、年不相応の蠱惑的な笑みを浮かべた。

魅入られた、とリズィは思った。まるで心臓を掴まれたかのよう

に、その笑みから目が離せない。紅の瞳がゆるく笑みの形になった、それがきれいすぎて、違うものなんて目に入らない。
ふらりと、脚が前へと進む。

「リズィ」
「うわあ！？」

耳元で声がして、はっと我に返る。リズィの腰を抱くようにいつの間にか魔王がいた。先ほど立っていた位置より少しローズのほうへと近付いている。
全然気づかなかった。魔王の手がリズィの腰を引き、自分の方へと引き寄せる。その顔はローズに向いたままだ。

「俺の嫁に悪戯はやめてほしいな」
「あらら、嫉妬？　夫婦なのに余裕がないの？」
「黙れ。おい、メディ」
「あーい」

ローズの登場と同じように、彼女と魔王の間にぽんと人が落ちてきた。衝撃を殺すようにしゃがみ込んで、彼はぱっと立ち上がる。
どことなくシドと似ている青年だ。年も同じぐらい。明るい茶色の髪に、へらりとした気の抜ける笑み。メディ、と呼ばれた彼は魔王に向かって軽く手を上げる、と思いきや、見ているのはリズィだ。

「おれはローズちゃんの従者で、そっちのシドとおんなじ竜族のメディっす。よろしくお姫さん」
「ちゃん付けはやめなさいと言ってるでしょ」
「えー、でもだったらなんて呼ばれたい？　ローズたん？　ローズ様？　ローズ姫？　ローズ殿？」

へらへらと彼は笑う。魔王が浮かべる甘ったるい笑みよりはよっぽどか好感が持てる笑み。ローズが呆れた顔で従者の耳を引っ張れば、メディはいでいでと顔をしかめた。あ、なんかすごく気がぬける笑みだ。

そして、彼女はふわふわとそのドレスを揺らしてこちらへ近づく。魔王の横をすっと通りぬけ、リズィの手を握る。うわ、と驚くリズィの反応もなんのその、先程の艶やかなものとは又違う笑みを向ける。

「あたくし、ずっとあなたと話してみたかったの。いったいどんな方が人間の身で魔王と結婚なんてしたんだろうって！」

リズィの手を握る手は、女の子らしい小さなやわらかい手。それを無碍に離させることもできず曖昧に笑う。僅かな間を彼女はぐいぐい詰めてくる。

「ねえ、どうして結婚しようと思ったの？　魔王のことをどう思ってるのかしら？　あなたは魔王を愛してるの？」

「……ローズ、黙れ」

魔王が低い声で言えば、渋々といった様子で彼女は口をつぐんだ。けれども好奇心たっぷりの瞳は変わらない。

魔王のようにぐいぐい押してきているのは同じだけれども、相手が女の子というだけで抵抗しづらい。正直、逃げたい。

「あ、あの……ローズ、さん？」

「ローズでいいわ、リズィ」

いいわ、という割にその口調は有無を言わさない。

ぎこちない動きでリズィは横を示す。

「とりあえず、座らない？」

今や誰も座っていない、テーブルと椅子を。

▼

紅茶を口に運ぶ様子は優雅。リズィと違ってきっといいところのお嬢様なのだろう。ドレスも服に着られているのではなく着こなしている。

椅子に座れば先程のようにぎゅうぎゅうと近づかれていたときよりは距離があく。少しだけ安堵しつつ彼女を眺める。リップでも塗っているのか艶やかな唇、カップを持つ爪はマニキュアを塗った様子もないのに淡い桜色だ。その目がこちらを向いて、つい背筋を伸ばしてしまう。

「あたくしと魔王様の種族は比較的近いの。だから子がなせるんじゃないかと昔やってみたことがあるのよ。結果的には駄目だったのだけど」

さらりと言われたが、今とてもただれた話を聞いた気がした。魔王を見れば、クッキーをかじっていたがリズィの視線に気づいて唇で弧を描く。この子づくりだけ男めという想いを込めて睨みつければウインクされた。

「こいつ……」

「どうかしました？」

なんでもない、と首を振った。

「ローズの種族ってなに？」

「ヴァンパイア。だからさっき少し悪戯をしてしまったのだけど、ごめんなさいね？」

「や、うん、別に……」

こんな可愛い子に目をうるうるさせて言われたら頷いてしまう。先程メディと呼ばれた従者がひょいと顔を出した。

「あーローズちゃんまたそうやって泣き落としようとしてー。お姫さん、騙されないほうがいいよ？　この人いっつもこうやって泣き落としして男騙すんだからさー」

「おいメディ、主の評判を下げるな」

「いいじゃんシド、被害者は少ないほうがいいよ？」

「本当本当」

「ほーら、魔王様のお墨付きー」

「うぐっ……」

いひひ、とメディは歯を出す。シドは悔しそうに下を向いた。魔王はわざとらしく溜息をつく。

「本当にひどいなあ、リズィ、女に浮気しないでよ」

「してない！」

「ってことは本気は俺にあるんだ」

「違うっ、そっちじゃなくてローズが好きだってほう！」

「あら、そうなの？」

「えっと恋愛的な意味じゃなく、っていあもうっ！」

ひっかけられた！

がしがしと赤茶色の髪の毛をかきむしる。本気も浮気も、誰かに恋してるとかそういう話じゃない！
くすくすと、笑い声が重なる。

「可愛いわね」
「当たり前、リズィはこれ以上なく可愛いよ」
「自慢？」
「だいたいは」

魔王とローズは口元に手を当てて笑っている。
魔物というのは人間で遊ぶのが好きなのか。いやいや、ミリアやシドはそうじゃない。ぐるりと見回せば、ミリアとメディがなにやら話して笑いあい、その横でシドが恨みがましい目で彼らを見ている。どちらかというと、魔物はみんな人間より可愛かったり顔が整ってたりするのか、というほうだ。
魔王は口の端を上げる。

「リズィは誰よりも可愛いよ。本当に、ね」
「あんま恥ずかしいことばっか何回も言うなバカ。……ローズ？」
一瞬ローズが顔を歪めたように見えた。
「どうかしたかしら？」
改めて見直したときにはそれはもうなかった。み間違いだったのかな、とリズィは首をかしげる。
「ううん、なんでもない」
そうなの？　とローズは紅茶をすすった。つられてリズィも一口

飲む。ミリアがリズィのために淹れてくれた紅茶だ、甘さも何もかもちょうどいい。

「さて、と」

魔王が腰をあげる。

「自主的に仕事にもどるなんて珍しいな」

嫌味のひとつも言ってやれば、魔王は嬉しそうな顔になる。

「それはもっと俺と一緒にいたいって意味？」

「違うっ！　顔近づけるな、お前がいくら言ったって私はお前の子供なんかつくらないんだからなっ！」

椅子ごと体をのけぞらせる。椅子の前足が浮き、ぐらり、とバランスが崩れる。倒れる！？

「っと。危ないなあ、お姫様は」

椅子の背を、魔王の手が支えていた。

「あ……ありがと」

「どういたしまして。でもお礼は言葉よりキスがいいな」

「嫌だ！　バカ！」

悪いヤツじゃないかも、なんて思うんじゃなかった！

唇を付き出してくる魔王から、今度は椅子から飛び退いて逃げる。従者三人のほうへ駆け寄ろうとして、視界の端にいたローズの表情がまた曇っているように見えた。リズィの視線に気づいてこちらを

見たときにはすでに淡い笑みになっていたけど。
腰を伸ばして魔王は城へと脚を向ける。ぱっとシドがその後ろに駆け寄る。そこで、魔王は振り返った。

「そうだ、ローズ」
「何かしら？　魔王様」

ローズは、魔王が何も言う前にカップをおろし腰をあげる。

「ちょっと来い」
「はぁい」

彼女はリズィに軽く手を振り、シドの更に後ろを追いかけるように後をついていく。「ローズちゃん置いてかないでー」とふざけた声をあげながらメディも走る。
ぽつんと、リズィとミリアが残された。一気に半分以上の人が減り、妙に静かに感じる。

「私たちも戻りますかー？」
「ううん、このクッキー食べてからにする」

チョコチップの入ったクッキーをかじる。
ビターチョコなのか、ほろ苦くかんじた。

▽

従者二人には外で待ってろと言いつけて、ローズと魔王のみが仕事部屋へとはいる。久しぶりに入れてもらった部屋の中は相変わら

ずで、ローズは淡く笑む。その肩が、予備動作もなくドアへと押し付けられる。痛みに僅かに顔を歪ませる。
彼女をドアに押し付けている張本人は、庭で浮かべている甘ったるい笑みなんてかけらも残さず拭い去ったかのような無表情。彼女の見慣れたいつもの魔王だ。

「あらあら、随分とお怒りのようね魔王様。いったいどうしたのかしら？」
「目的はなんだ」

からかう口調にも魔王は反応しない。鋭い視線がローズの紅の目に刺さる。黒い瞳もあの子のためか。よっぽどあの子のことを大事にしてるのねと内心笑う。

「言ったでしょう？　貴方の犠牲になった可哀想なお姫様を見に来たのよ」
「それは勘違いだな。彼女はなんだかんだ言いつつ楽しそうにしているよ」
「貴方が何も言っていないから、ね。貴方が真実を伝えられないんだとしたら、あたくしが伝えてあげましょうか？」

ぎりりとローズの肩を抑えつける手が彼女の肩に食い込む。けれども彼女は今度は顔色を変えない。むしろ、魔王の様子を面白がるような微笑が口元には浮かんでいる。
事実、彼女は今とても楽しい。楽しくてたまらない。この魔王をこれだけ揺さぶれるのは、あの哀れなお姫様だけだろう。

「どうかしたのかしら？　言われたら困ることでもあるの？　ああ、あれだけ愛を囁いているくせに貴方は欠片もあの娘のことを愛していないということ？　それとも貴方の魔力のことかしら？」

ゆるりと、魔王の白い顔に手を這わせる。日に当たってもほとんど焼けることのない白い肌。滑らし彼の胸元へと下ろす。とん、とそこを叩いた。

「あの娘は壊れちゃうかもしれないわね？」

「黙れ。そしてそのことをあの娘の前で言うな」

続けようとした言葉は彼女の喉元で強制的に止められる。どんな魔物も魔王が命じれば絶対服従。それは魔王のもついくつかの力のうちのひとつだ。

魔王は表情は変えないくせに、指の力だけ強める。内出血ができているかもしれない。吸血鬼の能力ですぐに治るだろうけれども。

「あの娘に余計なことを言うのはやめてもらおうか。それに、リズィにはちゃんと逃げたら国ごと奪うと言ってあるよ。あの娘は可愛いけれども馬鹿じゃない。どうしたらいいのか、ちゃんとわかっているよ」

口先だけで魔王は笑う。これが彼の本来の笑みだ。砂糖と蜂蜜で塗り固めたような、あんな甘ったるいものとは対極に位置する絶対零度の笑み。言葉を出せないローズを嘲笑う。

ローズはあのお仕着せのドレスを着せられた少女を思い出す。魔王の言葉にいちいち照れ、怒り、相手をしている。可愛らしくて哀れな娘。

魔王の手がローズの肩から離れ、軽く彼女の喉元をつつく。ん、と小さな声が漏れる。

「貴方は、もうすぐ後悔するわ」

「後悔？　俺が？」

心底意味がわからない、とでも言うように魔王は首を傾げる。
あの娘は人間だ。魔物ではない。
「貴方は生まれつきの魔王だから、嫌なものはなんでも操って誤魔化してきたわ。けれどもあの娘にはそれが効かない。貴方はもうすぐ、何故彼女が操れないのかと悔いるわ。その時が見物ね。玩具のはずの生き物に振り回される魔王様なんて」

それは、一種の願いだった。
あの娘が逃げて逃げて、この魔王の手の届かないところまで行けばいい。飼い殺しにされるには勿体無いと思った。それに、捕まえようと魔物たちを意のままに動かして、けれども捕まえられないと憤る魔王、それが見たかった。見て、嘲笑いたい。そして、あの子には幸せになって欲しかった。魔王のいっときの気まぐれのために人生を壊されるのは哀れすぎる。……もしかしたら、それは自分と重ねているからかもしれない。

「馬鹿だな」

魔王はいっそ優しさを込めた声音で言う。
「あの娘は玩具だ。玩具が自力で逃げられるわけがないよ」
「そう思っていればいいわ。あの娘は強いわ」

触ったときに流れこんできた思考。あの娘は本気で魔王を信じていた。崩されてしまうのは可哀想だけれども、逃げてほしい。逃げられなかった自分の代わりにも。
魔王の指が着き刺さっていた箇所を軽く手で撫ぜてから、ローズはいつも通りの淡い笑みを浮かべる。

「それと魔王さま。報告よ」

▽

「って俺たち外かい！」
「まあ予想はしとたけどな」
「なぁなぁ、二人して中でなにしてると思う？」
「魔王様の会話の止め方から言って、恐らく邪魔されないように封じてるんじゃないか？」
「いやいや、もしかして焼け木杭に火がついたりして？」
「んなっ……いや、ないだろそれこそ」
「でもローズちゃんにしてみれば、ずっと自分のモンだった魔王に現れた嫁……そしてそいつのことが魔王は大好き……ときたら押し倒して、ってなんか音したな」
「いやいやいやっ、そんなことは！」
「まーないだろなー。ローズちゃん魔王の子作りとかサイアクとか言ってたもん」
「ああ……。だろうなあ」
「早漏とか？」
「おまっ、言っていいことと悪いこと考えろ！　ままま魔王様は聞かれてないだろうな？」
「大丈夫だろ、ローズちゃんの言葉封じるほうが大事だろうし。魔王様、あの娘のこと随分楽しんでるんだな」
「まあ、な。あと主人に“ちゃん”はやめろ」
「本人いないんだからいいだろー。固いなぁシドは」
「お前みたいになるぐらいなら固いほうがいいよ」
「固いと女の子にも嫌われるってよー？」
「俺はお前みたいに女の子にモテなくていいからこのままでいいんだ」

「あの水の娘にも嫌われちゃうんじゃねー？」
「ミリアに！？」
「おー食いついた食いついた。シドさんやっぱ水のメイドちゃん大好きなんだねぇ」
「そっそのにやにや笑いをやめろ！　年上をからかうな！」
「かーわいーなぁシドにーさんは」
「やめろ、やめてくれ……。……おい、それは長老も知ってる、のか？」
「いんや。これは俺ぐらいしか知らないんじゃね？　魔王様とかローズちゃんはどうかは知らんけど」
「そうか……。よかった」
「ばーさん、子を生めや増やせやそればっかだもんな」
「馬鹿馬鹿しいとは思うが、そうしなければ魔王様のように独りきりになるからな。そうか、あの長老にばれたら俺はもうここにいないか」
「だから絶対バレんなよ？　お前バレたら年齢的に俺がここになるんだよ。そしたら彼女とデートできねーじゃん」
「お前、恋人がいたのか？」
「うん」
「竜族か？」
「おう」
「それは、よかったな」
「お前の妹」
「なっ」
「よろしくね、義兄さん♪」
「なっ、おまっ、きっ……貴様ぁぁぁぁぁぁぁ！　ピアに何を！ピアに！」
「健全にお付き合いさせて頂いてまーす」
「おれっ俺はっそんなの聞いてないぞ！」
「それと半年後に子供生まれる予定だから」

「うわぁぁぁぁぁ！？　どこが健全なんだぁ！　貴様一体どこが健全なんだ、その口で言ってみろピアをよくも傷物にうわぁぁぁぁぁぁ！！」
「メディ、行くわよ」
「ほーい。そんじゃ、バイバイお義兄さん♪」
「待て！　殴らせろ！　お前も傷物にしてやる！」
「いやーんそしたら俺を貰ってくれるのー？」
「メディいいいいいいいい！！」
「うるさい、シド」
「申し訳ありません……」

▽

テーブルの上にあったクッキーを全て胃の中に収めて、ミリアがまた淹れてくれた紅茶を飲む。蜂蜜をたっぷりといれた紅茶は甘くて、なんとなく嫌な感じだったのが収まった気がする。

「ありがと、ミリア」
「いえいえー」

ミリアの笑顔がじんわり染みる。

「ミリアも一緒に食べる？　このクッキー美味しいよ」
「私は遠慮しますー」
「え、クッキー嫌い？」
「いえいえー、私が食べちゃうとぉ多分食欲なくなりますよぉ？」
「そんなことないって。ほら、食べよ？」

半ば無理矢理に腕を引っ張り座らせて、クッキーを持たせる。ではいただきますー、と言ってミリアは口に運び。
そうだった、ミリアって半透明なんだった、と今更ながらにリズィは思い出した。噛み砕かれるクッキー、口の中から消化管に入るクッキーの欠片、それが奥へと送られる。そのすべてとまではいかないが、半ば見えるのだ、ミリアの体は。
リズィの表情からわかったのか、ミリアは済まなそうに頭をさげる。

「申し訳ありませんー、お見苦しい物を見せちゃいまして。食欲、なくなっちゃいましたぁ？」
「そ、そんなことないって！　食べれるよ！　クッキー美味しいし！」
「よかった！　リズィまだいたのね！」
「だからそうだって言いましたろー」

艶のある声にぱっとそちらを見る。会いたい相手じゃないけれど、この空気を壊してくれるなら良かった。メディを従えたローズがこちらに駆けてくる。
魔王との話は終わったのだろうか。ローズは高い位置で結った髪を揺らしてリズィの前まで来る。

「どうかしたかしら？　そんなに怖い顔をして」
「え？　そんな顔してる？」
「リズィ様、ごめんなさいー……」
「や、ミリアのせいじゃないって！」

へこむミリアを慌ててなだめる。たしかに見えちゃうのはちょっとばかりアレだと思ったけど、多分違う。なんとなくだけど。そんなリズィとミリアを柔らかい視線で見ていたローズだが、ふっとそ

の表情が曇る。

「嫉妬したかしら？」

「え？　えええええっ！？」

誰が。誰に。そんなの訊くまでもなく、ここにいて当てはまりそうなのはひとりずつだけで。

リズィは顔の前でぶんぶんと手を振る。

「そんなことないっ、絶対ない！　なんで私があんなやつ、っていうかあんなやつ大っきらいなんだから――」

っていうか、今一瞬淋しげな顔になったのってまだ魔王のことを好きだから、なんだろうか。さっきの変な魔法のようなもので魔王に自分のことを好きにさせたあとだったりするんだろうか。肩に力が入る。ローズは目を細める。

「魔王様のことが好き？」

「だから、大っきらいだってば！」

「なら何故ここにいるの？」

目が、すっと見開く。表情から笑いだとかそういうものが全て抜け落ちて、余計な物の何一つない顔。「ローズちゃん！　ちょ、まずいって！」と何故か止めようとするメディを手で制して彼女は続ける。

「魔王の花嫁なのよ？　あの人は、あなたのこと――」

く、と彼女の顎が上を向いた。喉が二三度上下して、眉根を寄せる。

「ろ、ローズ？」

彼女に手を伸ばしかけるが、ローズがそれを制する。

「なんでもないわ。ごめんなさいね、嫉妬してたのはあたくしのほう」

困ったような顔になってそんなことを言われたら、もう何も言えない。彼女は左右を見、言葉を吐き出す。

「あなたが、うらやましいわ」

「ローズ、」

「変なことばかり言ってごめんなさいね。メディ、帰りましょう」

「ローズちゃん、お疲れ」

ローズが声をかければメディはくるりと身を翻す。そこにいたのは彼女が来たとき空を舞っていた竜だった。ローズは片足を下げ、上品に一礼する。釣られるようにリズィも頭を下げた。

「それではリズィ。また会いましょう」

「うん……」

竜――メディに飛び乗り彼女は手を振り、そして空へと消えた。うまくいえないもやもやしたものをリズィに残して。

彼女は、まだ魔王が好きなのか。たしかに人間のリズィじゃあ魔王とはおかしいかもしれない。でも魔王としても唯一種故にそうしなきゃならない理由があって、だからこそリズィが選ばれたわけで。……あれ？　リズィでなければならない理由、ではない、気がする。

「何話してたの？」
「わっ、突然後ろから来るな！」
気配なんてなかった。ふっ、と耳に息を吹きかけられてリズィは文字通り飛び上がった。耳を押さえて振り向けば、どことなく不機嫌そうな魔王が上着の裾をゆるやかに風にはためかせている。
「なんで機嫌悪いんだ？」
「リズィがいるのに悪いわけないでしょ。……ああ、嫉妬かな？」
すぐにそれは拭い去られ、またいつもどおりの甘ったるい笑み。それに何故かほっとしてしまっている自分がいた。
「俺はものすごく心がせまいから、大事な嫁が他の誰かと話してるのは嫌なの」
嘘くさ、と。
言おうとした口に、突っ込まれた。
「んぐっ」
香ばしさが口の中に広がる。噛み砕けばクッキーの甘さが口中に広がる。文句を言おうと口を開けば更に奥に突っ込まれる。さっき食べたのとおなじチョコチップクッキーなのに、こちらはミルクチョコなのか甘ったるい。魔王の笑みと相まって胸焼けしそうなぐらいだ。
「美味しい？」
「っ、美味しい、けど人の口にぐっ」

食べきったらもう一枚突っ込まれた。
こいつは何をしたいんだ！　もう一息に全部食べてやる、と舌で口内に送り込もうとして。
かぷ、と。
逆側に、魔王が噛み付いた。
近い。近い、超近い。
顔の距離は指二本分ぐらい、つまりほとんど無い。
かり、かり、かり。
わざと音を立てて、焦らすように魔王の顔は近づいてくる。

「っうわあああっ！？」

魔王を押しのける。口からクッキーは落ちテーブルに落ちる。いつの間にか止めていた息がぜえはあと口から溢れ出す。
にやにやしながら魔王はリズィが落としたクッキーも拾い、自分の口におさめた。

「本当、リズィって可愛い」
「お前っ、人で遊ぶな！」
「遊んでないよ、本気」
「もっと質が悪いっ！」

ああ、顔が熱い。魔王なんてだいっきらいだ。
一瞬魔王がにやりと笑ったのにも気づかず、リズィはそっぽを向いた。

小話3（シド視点）

魔王さまの仕事は忙しいし、その従者であるシドも同じだけ忙しい。あれが欲しいと言われれば必要な資料を取りに書庫へと走り、あの文献どこだっけと言われれば万を生きると言われた竜の記憶力を引っ掻き回して場所を思い出そうとし、喉が乾いたと言われれば紅茶の用意をし、飽きたと言われればなだめすかし。要するに雑用である。気づいてたけど。

ということで、「ちゃんと仕事はやってるからちょっとどっか行ってて」と部屋を追い出され僅かながらの自由時間を与えられたシドは、部屋を出て大きく息を吐き出した。

先日元婚約者のローズが持ってきた話のおかげでだんだんと魔王は忙しくなってきている。魔王の苛々もたまり八つ当たりも増えてきたのでこの自由時間はほんとうに嬉しい。

「さて、と」

シドは城の中庭へと脚を向けた。

あまり他人に言ったことはないが、シドの趣味は小物作りである。可愛い布なんかをパッチワークにして袋を作ったり、ポプリを作ったりドライフラワーで髪飾りを作ったり。作ることまでが趣味であってそれをつけるのは遠慮したいところなので、出来上がったものは城下街の雑貨屋で売ってもらっている。天気も良いのでポプリのための薔薇を採ろうかとの中庭だ。庭師をしているドリアードからもちゃんと許可は得ている。

鼻歌でも歌いそうな軽い足取りで中庭へと続く渡り廊下へと出る。

「こんにちはぁ」

「あれ、シドさん？」

中庭には先客がいた。魔王の花嫁リズィと、彼女づきの水のメイドミリアだ。二人でお茶会の最中だったのか、中庭そなえつけのテーブルに二人で座りクッキーを食べている。この時間はミリアは休憩時間だったか、と頭の中に入っている彼女のタイムテーブルを思い浮かべる。

シドも最初驚いたミリアの食事風景だが、リズィはもう慣れてしまったのか平然としている。ミリアがクッキーを飲み込むたびに半透明の体にクッキーの欠片が流れていくのが見える。

「お茶会ですか？」

「はいー。リズィ様にお茶の淹れ方をお教えしているんですよぉ」

「まだミリアみたいには淹れられないけどね」

リズィははにかむように笑い、傍らのティーポットを指で弾く。こんな表情もできたのかとシドは内心瞠目した。魔王がいると、顔を赤くして怒鳴るか不機嫌そうに睨みつけるかの二択だ。

ミリアがカップに残っている紅茶を口に運ぶ。青い液体の中に紅色の液体が流れこむ。溶けこむこと無く一本の筋を作りメイド服の奥へと消える。

「美味しいですよぉ？」

「ミリアはどう淹れたって美味しいって言うだろ」

「そんなことないですよぉ。でしたらー、まおー様にお訊きしてみたらどうですかー？」

「それこそ絶対に嫌だ」

少女二人は顔を見あわせて笑った。ついつられてシドも口元を緩める。

「それでは、私は中庭に行きますので」

少女たちの横を通り抜けようとする。けれども彼のブラウンの上着の端が掴まれつんのめる。振り返れば、ミリアだ。思わず肩が跳ねるも無理矢理に冷静な顔を作る。触られただけでここまで興奮するとはどこの青少年だと自分にツッコミを入れる。

「なんでしょうか？」

「薔薇園に行くんですよねぇ？」

「はい。それがどうかしましたか？」

一輪渡したら喜んでくれるだろうか。彼女の髪に挿せばそれは良く映えるだろう。しかし意気地なしの自分がそんなことできるわけがない。

「だったら私たちも行ってもいいですか？」

きらきらと、目を輝かせて言ったのはリズィだ。ミリアもふわりと頬を緩める。

「食べたら一度行ってみようってミリアと言ってたんです。でも迷うみたいだから、庭師の人が来るまで待とうかどうしようかって」

「シドさんだったら大丈夫ですよねえ？」

小首を傾げるミリア。シドは、迷わず頷いた。

「はい、ご案内致します」

頬を緩めて頭をさげる。ミリアはやっと指を離した。

……悪寒に体が勝手に竦み上がる。さっとシドは城を見上げる。

城の二階の窓。真っ黒い瞳とかち合った。彼はシドに気付き、口元だけで嫌というほどにっこりと笑って見せる。
魔王さまがどっか行けって言ったんじゃないですか……！
戻ったら「なに人の嫁を誑かしてたのかなあ？」とねちねち言われること確実だ。今から頭がいたい。

「シドさん？」

ミリアがしたから覗き込んでくる。シドは、今だけでも幸せを味わうことを決めた。

「はい、行きましょう」

もう涙目だ。あとのことはあとで後悔しよう。二人を先導するように歩き出した。
薔薇園は薔薇で高い生垣を作っている。その入口、つるバラのアーチをくぐる。

「すごっ……！」
「きれいですねー」

少女二人のため息混じりの声が重なる。紅だけではなく黄色や白、桃など色とりどりだ。入り口付近で何本か手折れば良いかと思っていたけれど、こんなに純粋な反応されたらもう少し奥まで案内したくなる。

「ドリアードたちに言えば喜ばれますよ」
「た、頼めば何本かもらえるんですか？」
「それは私が言っておきますよ。どれが欲しいですか？」
「じゃあその白いの」

「こちらよりこちらのほうが綺麗に咲いていますから、はいどうぞ。ミリアも、いかがですか？」
「じゃあこっちのくるっとしたの、頂けますかぁ？」
「はい、どうぞ」
「ありがとうございますー」

ある意味目的も果たせた気がする。なんだかものすごく幸せだ。なんだかものすごく飛んでくる悪意っぽいなにかを気にしなければ、とても幸せだ。
奥へと歩いていく。途中分かれ道などがいくつもあるので下手に迷いこむと出られなくなる。以前、そうして迷った子供がいるのを知っている。つるバラのアーチを抜け、むせ返るような薔薇の香り。

「ミリアは前に来たことある？」

後ろをついてくるリズィの声に、シドの肩が跳ねる。
きっと覚えていないだろう。

「むかーし、来たことありますー。その時は迷っちゃったんですよぉ」

まだ幼い頃の話なのに、覚えてたのか。動揺を見せないようにシドは前を向いて歩き続ける。角を左に曲がる。奥にある薔薇の東屋を見れば二人は喜びそうだ。

「大丈夫だった？　ここ広そうだけど」
「はいー。助けてもらったんです」

ミリアは含み笑いをする。

「あのときは、ありがとうございましたぁ」
「……どう、いたしまして」

振り向けば、ふんわりとミリアが笑っていた。
つられるように笑ってから、奥へ奥へと脚をすすめる。

「あの時は、どうしてあんなところまで？」
「シドさんが見えたんですよぉ」
「私ですか？」
「はいー。シドさん追いかけてたら迷っちゃったんですよぉ」

ということは彼女が迷ったのはシドのせいだということなのか。
……それは、ものすごく罪悪感がある。

「なんでシドさん追いかけてたの？」
「どうしてでしょうねー」
「ミリア、なんか隠してる？」
「隠してませんよぉ」
「つきますよ」

シドは最後の角を曲がる。
ぱっと開けた場所。花の壁が左右に割れる。そして中央にあるのは薔薇だけでできた東屋だ。物理的に不可能であろうそれも、ドリアードたちの魔術を駆使すれば簡単にできるらしい。

「わあ！　すごいっ！」
「前も、ここでシドさんに助けてもらったんですよねぇ」
「よく覚えていますね」
「はいー」

リズィは駆け出し東屋の中へと飛び込む。彼女が腕を伸ばしても届かない位置の屋根をぽかんと口を開けて見上げている。それはとても子供っぽくて可愛い仕草だ。魔王が使う可愛いとはまた別次元の可愛いと言う物だ。

上着の裾がひかれる。見れば、またミリアの手が掴んでいた。

「どうかしましたか？」

「いいえー」

ミリアはふわりと笑った。それだけで幸せだった。

▼

「随分と楽しそうだったねえ？」

「魔王さまがどこかに行けって言ったんじゃないですか……」

「人の嫁誑かさないでね？　あとあの子の髪に薔薇挿したのシド？」

「違います！　私だったらミリアに挿します！」

「ほんっと君は正直だね」

「……それは、褒められてるのでしょうか？」

「ぜんっぜん」

小話4

何気に魔王とその花嫁の触れ合える時間は少ない。新婚だというのに魔物の国の王様に休みはない。国民の声を聞いたり次の侵攻先を決めたり戦力を考えたり云々。一部の仕事は軍を任せている魔物に押し付ければいいし他のことも他人に任せられるものもいくつかあるのだが、先日ローズが持ち込んできた案件なんかは恐らく魔王本人が出向かなければならないだろうし。

要するに、リズィ成分が足りない。

「シド、飽きた」

終わらせた書類をシドに渡せば「私もです」と返される。そして目を通すべき本を渡される。ぱらぱらと流し見すればもっとちゃんとやってくださいと怒られた。

反乱なんて馬鹿馬鹿しい。どうせ魔王の一言でやめさせられるのに、どうしてそんな面倒なことをはじめようとするんだか。

「リズィが足りない。嫁と遊べないなんてひどい職場だなあ。早く辞めたいよ」

「頑張ってください」

「それはどっちの意味で？」

仕事を？　子作りを？

いい年して純情青年シドは顔を赤くしてそっぽを向いた。さすがに男のそんな表情を見ても全くもって嬉しくないので放置していた陳述書に目を通す。だんだんとこちらを見ても物騒になってきているのはわかる。無意味なのに。

はあ、とため息を付けば紙は舞い上がる。魔王は立ち上がる。

「よし」
「ちょっ、魔王さま！　どこに行かれるんですか！」
困惑顔は見慣れたものだ。思えば、シドはいつも困っている気がするし。
「ちょっと散歩」
「本日の分はどうするんです！　幼い頃からいっつも宿題放置して散歩に行ってたじゃないですか！」
「今日中に終わらせるからいいでしょ。大丈夫、ちゃんと戻ってくるから。多分」
「そう言ってそのまま遊びに行かれたこと何回もあったじゃないですかぁ……。私が探しに行ったらもうちゃっかり戻ってきて晩ご飯食べてベッドの中とか」
「何年前の話？」
これだから昔からいる従者は。
追いすがってくるのをドアを閉めてさようなら。さて、と魔王は左右を見る。
我が妻はどこにいるだろう？

▼

彼女の部屋を覗いてもいない。この間の事を思い出してメイドの控え室を覗いてもいない。どこに行ったんだろう。暇なときどこに行くのかがすぐわかるほど魔王は嫁のことをしっているわけじゃない。

あの量を仕上げるにはあんまり遊んではいられない。シドの困り顔には全く罪悪感はないけれど、終わらないとあとで苦労するのは自分自身だ。しかも、今回は恐らく出張らなければならないだろうし。面倒なことこの上ない。

彼女と遊べる時間がゆっくりゆっくりと減っていく。早足で城の中を意味もなく歩きまわる。廊下の角を曲がる紅茶色の後ろ髪が見えた時、人知れず笑みが零れた。

「リーズィ」

「うわっ！」

瞬時に近づいて耳元で囁く。跳ねて驚くのはやっぱり面白い。「脅かすな！」と橙色の瞳が睨みつけてくるのはもっと面白い。警戒心たっぷりの目なんてそうそう見られたものじゃないし、その攻撃があたると痛い、なんて他じゃ味わえない面白さだ。今のところリズィがでこぴんですら攻撃してきたことはないのが不満だが。別にMじゃないけど。

「会いたかったよ我妻よ！」

「私は会いたくなんかなかった！」

毛を逆立てた猫のようだ。じりじりと距離を開けられる。忙しい中を無理して来たのにこの反応はあんまりじゃないだろうか。だったら、少しぐらい、死なないぐらいいじめたっていいはずだ。

「そんなに俺のこと嫌い？」

「嫌いに決まってるだろ！」

「じゃあ殺してよー」

言われたら言い返すを繰り返していた口が弧を描いたまま凍った。

やっぱり予想通りに可愛い反応だ。これがシドだったらこうはいかない。またですか、と苦い顔をして鋭い爪が顔を抉り、それだけだ。魔王が拒否すれば抉ることすら無く爪は弾かれる。これが楽しめるのは魔王の言葉に従うことのない、人間だけだ。反応が面白くて言葉を重ねていく。

「俺のことは嫌いでしょ。だったらほらほら殺してよ。死んでも魔王は辞められるんだから、俺の望み通りだよ」

そしたらわざわざ俺と子を成さなくてもいいんだよ、との意味を込めて。ひどい事をしているという自覚はある。多分魔王との子を成したらこの子は死ぬし、殺したらそのときには廃人になってそうだ。魔王は残虐で悪辣非道。わあ、物語の魔王そのままじゃないか。

細い肢体に力が入る。ドレス越しでもわかる細い腰。強く抱いたら折れるんじゃないか。そういえばこのドレスはあまり似あっていない気がする。女の子の好みそうなドレスということでレースなんかたっぷり付けたものをえらんだけれど、彼女にはもっとシンプルなほうが良い。下着はあの路線のままだけど。

口を真一文字に引き締める。ああもう可愛くてたまらない。

「俺が死ねば君は俺といなくていいよ。ああ、君に悪いことはないように魔物たちにも言い含めておくよ。大丈夫、殺しても問題ないよ」

「こ、のバカ！　黙れバカ魔王！　バカ！」

ぺちり、と。

平手は、魔王の胸元に飛んだ。金具のついた部分なので人間のやわい皮膚ならば怪我でもしてるんじゃないかとそちらが気になった。最初は頬にしようとしていたのか、変な軌道を描いた平手。

つい、一歩後ずさる。橙の瞳には炎が灯っていた。きらきらと輝

いている。

「私はおまえなんか大っきらいだ！」

「知ってるよ。だから」

「だから！」

魔王が説明を続けようとすれば遮るような大声を出す。胸に当てられていた手が、ぐいりと上着の胸元をつかんだ。彼女のほうが頭ひとつ半は小さいので、完璧に胸ぐらを掴む形にはならない。

「嫌いだからお前の言うとおりになんかしないからな！　お前を殺してなんてやらない！　言いなりになんか絶対ならない！　絶対にだからな！」

語気は荒いくせに、何故か泣きそうにも見えた。

兵士だったくせに甘ったるい。魔王の吐く言葉だってとても甘ったるいつもりだったのに、彼女の考えのほうがずっと甘い。子作りしてくれなくても殺してくれるようにと兵士を選んだ筈なのに、とんだ誤算だ。でも、そんな玩具も悪くない。

「だったら、俺はどうやって魔王をやめたらいいの？」

わざと哀願するような声をだす。瞳は揺らぐ。あ、だとかう、だとか母音だけを口からだして、けれども言葉になる前に閉じる。

まあ、楽しませてもらったからこれぐらいでいいか。唇を笑みの形に歪める。

「いつか俺の子を産んでね」

「バっ……」

カ、とは続かなかった。眉間にしわを寄せてじっと魔王を見る。これはおもしろい。予想していたのとはまた別の反応だ。人間の女ってみんなこんなものなんだろうか。サンプルにもう一人か二人拾ってくるか。

何をいえばいいのかと悩んでいるらしく、唇がふるふると動いている。……時間だ、戻らないと。

彼女のふわりとした髪に触れるか触れないかのあたりで頭をなでる。ぱっと目が丸くなったので魔王はもういいかとくるりと背を向け――ふわり翻った上着が彼女の捕まれ止められた。

「なに？」

「お、お前、が」

言葉を探すように目は左右に動く。

「魔王を辞められる方法、とか、そういうの、探すの、手伝う……から、」

「ありがとう」

伏せていた目が上がる。今にも泣きそうな瞳だった。何故彼女が泣きそうになるのかわからない。リズィがなく必要はないし、泣くべき言葉もかけていないはずだ。

上着を掴んでいた手が落ちる。魔王はうっすらと笑い、廊下を歩き出す。

「可愛いなあ」

呟いた声は、きっと彼女には届いていない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1348u/

魔王と救世主

2011年6月27日09時14分発行